

あとがき 映画『悪名』と中村玉緒

6月9日に中村玉緒が86歳で亡くなった。1962年に結婚した勝新太郎とは、1997年に65歳で見送るまで35年間連れ添い、それから29年後の死であった。

今東光の小説『悪名』は、1960年から翌年にかけて『週刊朝日』に連載され、新潮社から出版された。当時は大人気で、16本の映画と2本のVシネマ、そして6つの舞台にもなった。『週刊朝日』は1958年に150万部を超え、その全盛期にあった(2023年の休刊時は7万部)。沢島忠『人生劇場 飛車角』(東映、1963年)がヒットしてヤクザ映画というジャンルが生まれる直前、安保闘争後の反体制的な空気が広がっていた時期でもあった。そして、主演の勝新太郎と弟分の田宮二郎にとっても初めてのヒット作であり、二人の人气が続編のヒットにもつながっていったのだ。

中村玉緒は最初の田中徳三『悪名』(大映、1961年)で食堂の女店員・お絹を演じ、主人公の朝吉こと勝新太郎に、「あなたを一生の妻にします、右まさに相違なく候」と書いてと命じる。勝新は「まるで受け取りみたいやな」とボケながら夫婦約束の証文を書く。勝新と中村は、この映画のクランク・イン直前に婚約しており、依田義賢のシナリオは、その事実に沿った当て書きだったのかもしれない。

『悪名』シリーズでの二人の共演は、三作目の森一生『新悪名』(大映、1962年)までだが、二人の共演はこのシリーズの前の渡辺邦男『源太郎船』(大映、1960年)での夫婦役にはじまる。その後、森一生『不知火検校』(大映、1960年)、田坂勝彦『小次郎燕返し』(大映、1961年)、今東光原作の森一生『化身』(大映、1962年)、そして勅使河原宏『燃えつきた地図』(勝プロダクション、1968年)での夫婦役に至るまで、様々な役柄で共演した。最後の舞台『夫婦善哉 東男京女』(大阪新歌舞伎座、1996年)でも夫婦役を演じたが、その巡演中に勝新のガンが発覚し、翌年、帰らぬ人となったのだった。

今東光は生涯に43本もの映画の原作となる小説を書いたが、その三分の一が『悪名』シリーズであった。ヤクザ組織に属さないまま暴れまわる「八尾の朝吉」がいかに大衆に愛されたキャラクターだったかがわかる。千葉生まれだが河内弁をあやつる勝新と、京都生まれでしっかり者の玉緒の軽妙なやりとりが楽しめる『悪名』シリーズは各種配信でも観られるので、追悼も兼ねて、一度ご覧になっては如何だろうか。

(早稲田大学文学学術院教授 鳥羽耕史)



「今東光資料館だより」の
バックナンバーはこちらから

KON TŌKŌ MUSEUM

今東光資料館だより

令和8(2026)年8月 No.7

編集・発行：今東光資料館 tel.072-943-3810
〒581-0003 大阪府八尾市本町二丁目2番8号
八尾図書館3階



『テント劇場』のことばたち

前回の資料館だより(No.6)でお知らせしたとおり、『テント劇場』(昭和32(1957)年5月～7月サンケイ新聞 東光連載小説)の紙面を、その挿画：中村眞(真)氏の原画とあわせ公開してきました。

同作は200ページ余り。数時間で読める作品ですが、個性豊かな登場人物たちの人間味ある生きざまや、東光得意の「河内の郷土講義」ともいえる当地のエピソードなどが豊富に盛り込まれ、一気に読み進めたくくなります。

この作品のなかには、登場人物のセリフを借りた「東光の言葉」も多く記されています。今回はそれらをご紹介します。

「男でも、女でも、独占慾おこしたらあかんで。何でゆうたら、苦しまんならん」(「裸婦の図」より)

「さあ。好きとか嫌いとかいう余裕ないねんな。わてが役者やなかったら、病氣してるか、死んでると違いまっか」(同上)

「善い悪いの問題やない。愛情だけが、たしかなもんや。僕は、それしか考えへん」
(「習慣のままだに」より)

「冷え冷えとするほど恐ろしい退屈いうもんは、芸術を知らん社会のことや。

僕等には、なんぼでも舞台が与えられてるんや。(略)」(「情熱の河」より)

「僕は、この社会に飛び込むまでは、死ぬほどの退屈に苦しんだんや。それがどうや。

この劇団に入ってから、僕は、生きてる人間だけが相手になったがな」(同上)

「あの子みたいに、考えるより、直ぐ行動する奴の方が、おもしろい生き方やな。

行動してから、ゆっくり考えられるがな」(「風のように」より)

「(略)勇氣や。何でもかでも勇氣や。うち等に足りんもんは勇氣や」(同上)

企画展示では色々な作品中の「東光の河内の郷土講義」をご紹介することが多いですが、同じように「東光の金言」もたくさん散りばめられています。ぜひ東光作品を手にとってみてください。(岡本)

【企画展示情報】『テント劇場』～変わりゆく河内平野～令和8年9月13日(日曜日)まで

「雲の中を歩く男」(『華やかな死刑派』昭和47年11月 新潮社発行所収)

「雲の中を歩く男」は大正8年、将来を嘱望されながら二十歳で夭折した画家・関根正二への東光の鎮魂歌であり、東郷らと共に駆け抜けた大正時代という一瞬の華やかさと、情熱的な芸術家たちの青春を記録した小説でもあります。

関根は幼なじみの伊東深水を通じ久米正雄の知遇を得て、大正7年5月、有楽座で上演された久米正雄作、山本有三演出『地藏経由来』の舞台に百姓のエキストラとして東光、東郷、佐佐木茂索、陽成二、上野山清貢らと出演。また同時に上演された生田長江作、久米正雄舞台監督『円光』の舞台背景に一枚の油彩画〈婦人像〉を描いたというエピソードがあります。

…「へえ。一晩で描いたんか。うめえもんじゃねえか」と僕が褒めると、
「俺はモデル無しで描くんだ」と関根正二は傲然として言った。

しかしながら傍に立っていた東郷青児は、ふん、と鼻で笑っていた。彼は十九歳で二科賞を取った未来派風の画家として既に名をなしていた。けれども未来派風の絵なんて購う物好きはその当時の日本の何所にも居なかったの、折角の作品も売れたためしはなく僕と同様に貧乏していた。唯東郷青児は貧乏が嫌いで、従って貧乏人も嫌いだだったので決して金に困った顔を見せなかった。いつでも悠々と遊びながら金をつかっている羨ましい境涯の画家という風貌を装っていたシャーラタンだった。…

大正8年、関根は運命的な失恋、精神の病、さらに当時大流行したスペイン風邪から肺炎を併発、療養もできない貧乏のどん底で「三星」を残しました。絵はオリオン座の三ツ星を連想させる三人の女性の顔が描かれていました。それを見た東郷はぎょうとします、そこには彼の知る、ひとりの女性にそっくりの顔が描かれていたのです。

…(やい。関根。何故くたばった——)

と泣きながら、僕は傑作『三星』の写真を眺めたのであった。彼は愛する人を聖なる女性にまで高めていった。しかしながら何という幸せな男であろうか。彼はかつて一度も現実の穢土には足を踏み込まなかった。飄々として雲の中を歩き、蒼然として二十の魂を昇天させたのだ。…

もし関根が早世でなければ、画家を志していた東光は関根についてもっと多くを語り、興味深い交友記が残っていたのではないのでしょうか。(木村)



「文化遺産オンライン」

東郷青児(1897年-1978年)

鹿児島生まれ。青山学院卒業後、有島生馬に師事、1916年第3回二科展に初出品で二科賞を受賞(19歳)。1928年第15回二科展に滞欧作を特別陳列、第1回昭和洋画奨励賞を受ける。1931年二科会会員となる。1945年二科会再建に努力し、1950・66年には功労賞を受ける。戦後二科会の中心画家となり、会長として二科会をリードした。

関根正二(1899年-1919年)

福島県生まれ。1912年伊東深水の紹介で印刷会社に勤め、会社の顧問に結城素明がいたこともあり日本画を描き始める。やがて洋画に転じ本郷洋画研究所、太平洋画会研究所に学び、河野通勢の影響も受ける。1915年第2回二科展に初入選(16歳)、1918年第5回展で樽牛(ちよぎゅう)賞。一躍天才画家と賞讃されたが翌年歿した。

(参考:1995年 第80回記念 二科回顧展より)

『小説の映画化について』

2026年に生誕100年を迎える世界的な映画監督である今村昌平氏のデビュー作品の原作小説が、東光の『テント劇場』であったことは、映画化された際のタイトルが改題されていることもあり、あまり結びつかないようです。今村監督は後年、この辺りの事情について「映画は狂気の旅である 私の履歴書」(2004年7月5日 日本経済新聞社発行)で回想しています。

初監督のチャンスは、翌昭和三十三年(一九五八)に巡ってきた。今東光の小説『テント劇場』を原作にした「盗まれた欲情」である。江守清樹郎という、後々色々な場面でやり合うことになる日活の専務がやってきて「そろそろ監督にしてやるから企画を持ってこいよ」と恩着せがましく言う。いくつか挙げた候補の中で、会社がかうんと言いい、私もまだと思ったのが「テント劇場」だった。

小説「テント劇場」の主人公である国田信吉は、旅芝居の一座に飛び込み看板女優である姉妹との恋愛と芝居演出にのめり込みますが、東光はラスト近く、国田が妹の千草に語りかけるこんな場面を用意しています。

僕はね、生活設計より、人間設計せんならん。第一歩から、もう一度、踏み出そう思うてんね。

(『テント劇場』昭和32年11月10日講談社発行版P216)
今村監督も小説の国田同様、自身が目指す作品へのこだわりと映画会社の思惑との狭間で、配役もタイトルも思い通りにならないまま試行錯誤の中にもまれつつ、なんとか作品を完成させます。その心境について監督は次のように述べています。

三十一歳というやや遅めのデビューで、目指すところの重喜劇にもまだ至らなかったが、私の気持ちは映画のラストで、長門を励ます妹娘の科白に重なっていた。「回り道なんてもんあらへんと思うわ。その回り道がまっすぐな道や思えば、まっすぐな道や思う道が、ほんまは回り道やちがうやろか」(前掲書)

一步を踏み出すことに対して、小説に呼応した二次創作のお手本のような解釈だと思いませんか。タイトルの改題を含めて、小説と映画の関係についていろいろ考えさせてくれる貴重な作品であることは間違いないと思います。